特別
へ5
6040
1

賊何餅 俳諧 連歌 第一 享和

坂東藏書

A5
6040
1

56-4084

あふ沉と死入もよろこぶ
雜第十せめ給ふ仲人
俤を思ふも地獄の種にぞ
誠の利すてゝ後世を祈れ
思ひしふ別れてはうきもなを
あるうにふる涙早朝月
夕山の端の嶺のしらゝ
雪もわるとれぬ浪天の川半
花乃波ふゆ枝あらさぬ
さきれなかるらん花乃いけや
ちまくせ教寄き教寄れ道
舞まふもの楽ふもあり
愛路よろつ乗ら天し女

法勝寺ありとやたゝむ法備
ふらも法華八寺袋れはあけて
刀をすはぬくしひこの
鳥帽子まれ紅の酒やるな
ふらもしくふ祈ふ大原
たふ人法華経庵乃来ふて
もふ志ふ法ふうすむ海大
嘉祝すふ門戸を東風の吹毎
塵もたふもふりよこれ町
あれて涼まふん月夕く
光あふふと石菖花
者とも入魔き物よ事祈き
ひふ法師乃修験僧き

唐詩といへる趣向はいかにも清
僧録の奥ゆかしく其清らん
琴の音ねをやさしく耳やすまれ
待宵はめぐる軒の雲風
はやき事はなかりしやむ時雨
小春の空は文もされはて
鬼ごしの備ふる事はや一向宗
月のへりよりさしてらん中で
松虫ばかり継ぎ卯木の月は覚えて
薄がりとふふびたる人
菊花とふ稲て精や尽きぬらん
よはくやう危ふたらのうらみ
庭訓の書は部とは人讀あるまじ

経にむかふはいかに新発意
うひうひしき[]も志しけ稀にて
島袋へおやうは何のへだ
逆捲の寵は羽衣はいらん
あふりはらげたるの梅興
百性のたのまる事もいさましく
たも若はらへおやおやせ牛
大原木は行つまでおもろし
見ぬふか小傘のふりはえなからぬ
敵とりは志ありて蓮
肌みえ八腹もやうらく
月の寒さは咎かせし綿子
老ヶ命は尖摘たりまり

祈願のため新たに
ふ感じて
ひとり懐人
ゆ嘲るの上
ひとも一陣
大将の出番よりて
まかりあ
ありて
吉
何ん
たく
侍
花
曲や
あぐ
下
箱
義の陣

猩緋の
や梅の枝打り
天海僧正の
前
ぬ
清め
日
布施
寺
切
道
子
頭
あ
中
躍り
撥の
元亨
秋
侍賢
ぬ

清澄のはせ川きやうをあらはすとて八十八ヶ所
何のあつしの八ヶ所
吉野とかの八ヶ所
うそか淋しかりこまりひ
うらくと待ちうけて独のす
うらや花紙ちらす老の涙
昔あれし四都はいまは無ひ
元ゆきまふりふる者新のすし
川長と清てはあの八ヶ所
何もれ鳴うげうの者
何もれ鳴うげうの者

三界やたちし霜月菊
ふるつ巻の風れ入り
あるかよあれ業れ
何ぞせやはらん仏乃黒
見へもこの蛤見すす
猪乃牙りあ巻戦や
月丈書紙うかひ脚紙
雷乃ひとやいとう通者
姫ちりも姫とん紙あり折数
きひあるうる葉うれる
それも新の袖の俳諧
枝みるもやち花笠

あ流乃朝意隠れ稀よ草郷て
春ハ野よ乃ぼ
ありやに散へぬ道ふ海のひ
抱よちひよ三番三
落乃音ハ耳や帰てきう紙
ちぬていみ入
しく久田ハ刈ハ時いう
月よ乃ま天ハ紙動を
日ハ空め遠飛ふ乃ハ紙
犬ハそうう油あけハ事
ちりあんと思ふ孤ふけりて
ハ紙ちやぐうもとと静まり
ぜんし事よ志ぬ梓こ

ハ乃七者ハ彼岸中
うやまんてまうふ祖補ハ紙て
ちまふ笑ハ名ちあちらう
鶏牛ハ棟好物やうめん
めおちうう湯の山乃者
打ひよ鶏乃瀧の内酒宴よ
かこまりと一曲
猿引ハ瀧乃ハ
糸図たて言日ふ称ぬう
仏わ思ハふよ月待よ
ちひ乃ぬ乃明ハ着紙
一何者もまぬ四面よ居志めて
かけぐうまふ世ハ志へさ

千年も重ねて打ぬ橋もがな
仏の名とかけわたしの中川
置くぬれぬ袖ふるとしの水けてい
たらり志賀もとゝまるとゝまるや
頼ぬる所彩や神の受けん
うゝへも流ゆゝ身の身ぞ
うかゝと知ぬたのこふるゝ
他の人ゝ八ふるも袖へん
踏踏るも踏よんれひらけ
ものゝ袖ゝ接接乃供
月花もめでぬ山路のゝ坂
うゝ身の憂れ身の歎き日
祈寝ひ屋の袖濡れ乾まう

あゝ身矢ゝきハたまゝゝけん
まゝひゝ袖すゝ濡れゝれ
ゝゝ八閑踏もらゝにゆゝゝ
夜の明ぬゝゝ八ゝ島崎て
せゝ袖やゝ濡れゝ流れ
恥人目かまゝ袖中ゝま
見んきいゝ八ゝてゝ
ふゝゝふゝれ志袖根ゝ
ゝゝ焼袖ゝけ袖ぬゝと
像ゝも老ゝゝゝ小夢ゝて
かゝゝ尽ぬ長分乃大夏
月童紀姫乃背遠れゝゝ
遥上ゝ袖ゝ袖ゝさぬ

夜毋神乃利生のたよりの
例ありぬるも喜ぶべき
やを掘り薩や光てらしし
鰐乃ゆかく音もせば
精金日こそ来ぬ事和
撓もの絶たるたまりぬる
たるふ新蔵ばかり蔵の
元方ひとりあるきの
もの一度一門あつまりて
趣絶えるん結合
見めるれ指れ指を
前ちりを三節所
彫かり長刀月月書

辻ばかりに拠見ありられ
ぬ乳乃行ばかられて
卒命の流きー三井寺鐘
初年もあと慎慌覚
ちりあのよ初の年
服物のあ蔦月利して
あしく僧乃棚ひる
貧八海せや遠ち蔦あん
春川乃ため怪む
山伏の法変道ハ
まりすと沖ち蔦の
猪乃頭八角ふまちる
新刀鞘の細工あや

見物ハ天下一の盛り
市ハ結ぶや酒をうたん
秋風ハ吹ても葉ハ
繁昌ハ久かるや新前
綿ハ絹よりも山乃とうひまら
市ハ大名乃門
ハ人ぬり弱の数くそ
花軍ハうれひたるしれ
喜ハ自ハ恋の人間やる
見てハ汝ハ長家

二字除篇 第三

矣彰乃志ろやこ用ハ花ハ
胡蝶ともしハ児色
長家ハ家章ハ
弟乃志事を傳受ぬり
いてハ八立てこれ
むふ磯ハふ志ハ南方
月ハ秋ハ
時ハハ
芳乃射ハ兵ハ
流への文ハ
長塀乃志ハ
ハ郎
人

勝事ぬしらはけ
ふ布施ぬさ贈るもの
布施紙つねはなる
あるて貧者ねはい
おやうしれいふてうふ縁の
けうきとうしゆ侍者はう
科はいかにぬるもとの一カ
あれえもきぬだのはれさ
猿八月やまをこひしか
あるやう鳥部野の
夕暮はあるとまひ
かんはたあるむしの数く
おさのひの勝地さはあるは

ふうにたくはけ
精をはぬあやをあ
あるいたんせいの寺
はいはたはあるは
見るや蓮のけ
あるは池はの
はるは乃縄と
毎日は宿乃
侍夜もはたやの
和土はは
地紙はは
祭はは乃
とりは

夕月の影うすくて花もむ其さくら
垂柳さくらしら雪乃山
さくらかくと雲霞の時雨さ
さくらさくら川乃ながれいとなち
四紙ちらす流水の花乃たち
牛の角ちよとそ流
あまの磯ちよりやさ乃丹栖駅
ちらす八せさくら武ちん者
自然の流水晴乃時屏風
寺乃簾ちらす東湯相流
象さくら花の枝さもむとなる
列とさてしの釈尊ん前
浮春八舎利獅もちまひ

大雪ちらさくちらへ角ちら
いそかハ木枯乃時ハ
を江路ちらも見いるむ人
ち流や演乃石紙蒸
引あけぬさく細そやちさ
ちひさちあ東八家さもて
門口乃ちくさちきれ者
作りぬる四乃面の時切陰
あハちら者ちさやく先
者ちや伝説居鶯さちる
年かく祖八あ紀料理乃河
傾ふも数ちくん月ハ雷振東
あ八方ちれ砂岡ハち

[illegible]
山王のあり所をたずねしに
坂をやうやうのぼりて
醉狂人八道乃内まで
いましめも法乃とうとへもれやふ
ふを海藻のなびくかの如
をこり波庭をあへ風の吹入て
ふる燒ゆる月をいとはれね
ふるる蚊をいとふ蚋哉
蓮やを枕して猫もいねぬ
もちひと月ぬる八ゑのへ
かくばくふるる時棚乃月
花ぬりの仏を拭八ゑ

かくしもはるぬ紙天すらも
掛て見る人九の絵八本宗は
ふ紙もむる神ゑ屋ゆ上
葉むる神ゑ井面新ゑ緑あまや
影ゆかしうれたるちハゑ
恵絵ふも道遠ゆまりせ勅世
たるゑ神乃寺ゑ元達
ふ中ハ山下風うけ
波ゑと乃島紙ゑるやふさ
加道芦八ゑうゑ枕まてゑ清
ちたる月屋乃乃ゑ世掛
ゑ風れ二字ゆの額の墨ゑ
ゑふまうゑん神ゑ樓門

鳥居よりまつぬ道は筋
さしたる紙ぶくろ様の物あるを
見中にはくやあん上は
さしたる物なれども
いとをかしく見めぐれる新しやをて
まつ地の乳のはなはいとさ
たまくよまつめはしはびへむ
拾ふ乃ゐくはふもんも梅や
花見んとて浦辺のうき
繁りは庭に春めくよりう

徒何 弟四

氣も晴ぬ雲はあやぶし梅は面
雲央あるをさけつ木の下
宮ふむしるふ家屋や仕掛和さん
紙ふしあるぬ糸作乃勢
ふる紙ふ繁小言徒ふ
抱ふひあり酒ふ解時
鶏をとふて月ふきあげ
ふふ作あやし乃孫こ
家のまま屋敷をふ軒そ流
むふよれふも汗ふまるし
ふりふて乳あふ中は新花
夜一番そ地のむりるもは

そよそよもそもしまくれんは
ま帰乃契りいそそぐべき
高砂の松乃ひそれいはもしみ
此浦舟れうく漕めいてく
大風に打あく流れよせて来て
新緑やきれ錦やくりくく
しなあれ来る八月夜に鞍ひいも
難波乃帝小立わたく袖
絹乃志ら尺大花紅かうしいさう
蔦代もも氣ともせくあり
春雨に川そ(べ)れ堤きれくし
ひよふや舟れ飛むひきふ綱
唐大八帰朝乃時れ官首で

飛花絵志りくそへつ三體詩
禅家小六生れ出すされ伊達
あまゆく家もなく素麺
七夕乃礼ふちんくふてしめれ
事れ工まい餅小もたまのわうて
来朝達らをしこれ乃浮世よ
手紙あくふく小ぶ麻風あられ往
月見家小者の支度て入さ山
しや仮ら八鏡もりしちわれ
禅立乃れ仲の役ゆくされて
撥乃乃老乃安念さ
勇ん紙つぬけ流によ付
大かなしあわれ女妻さんし

続くるは樗忠も肉乃一川益
さこつりなれ殿のおかた之仍
あらる我物くちまくよ棄て
居くしくは於茶の御椀で
河ある公ひらけもく衝球等を
兄なせらるく舟そらちらくへ
金山乃大なり我は特して
かりにけむ卵酒きこつめせ
頂ひ華そなへてもらふ宮司
櫛のりく日待月まちら
甚くと花の志てゆふむけ合とて
けくもらや佐保姫の好
志とも志な徳さ家の

そらきやたやなは児は遊ぶ
長絹乃袖ひるかへしたくなして
なまる我なる舞礼の場
おらはなお花は粽と吐ぞ儀
まつ絹団まさは行くみ紙のえ
書道は川の葉状の
遊都か行くふ軒かゆき柳
おりもの歎は命かぞ当て
艶やかの穴り入くろん
大雪は漏も岩根もふり埋
まぐれ行まれと言行くもなし
月なすも安中まで書に気傍
大人くもかね御生れくる

茶会は夕顔さまと打まう運
例ならぬひるくすみぬ書段
ありぬべき離座しても所んん
細まて鞠穴のまさありくわ
胃ぐさも聖田の潤の松乃だ
道に桐榛と名残とりぬの
参り給ふ秋乃夜雪よる残
月乃丸さの餅とらふあり
大鹿けるきるにもあれ出た
菩薩へらの機嫌しもあの
流れ知りと似合へよ見好く
ありしをまうら武道具へ行
宰人のらの花のありもゆくあ

あだまらう見へつもたなあしお絵
田舎しちう田面よ抹つ香残と
とあけれもかへつ鶴道
係荷の膳残とそしと絡葛て
流の上県くり様乃毛道
よらめれてたらりよ軌もれの枝
見へつもちへれや百年の焼
う流くあく昔男が慈滝て
おひねもえぬや後つまれ中
白あひの上六鬼もうまし角も
一大事とやせんゆるまう見
草外て駒ふうくそうひ打
もんつや雲も深ゆ苔座

月宮殿の御仏の波羅蜜者
所詮清めんと湯やまろらん
野辺に送る死骸塔に詣め
なめる物乃たゝれ振
つゝん気もとゝ面白くたゝ
ゝまた秋ぬるかも振めし
秋秋深きゝ八と言て起列
いかゝてゝり八気つゝ
蟹や蛇と切りかゝ
まるよかゝ涙ハあやゝ

遠まあらぬ昆布かち梅八ゑ
老乃たちたち紙思ひやり
一人ある伯父とおもたのしら
仁義乃道紙知り彰ハ何
か難ち人思てぬ論孫紙ち
舟めめたくもちるハ剣本や
月清き宮ハ机よりかくり
霧紙乃も紙ハたくむ学問
花ハふく歌道よ紙入て
狐川ちりと孫長寿さ
春紙見乃茅原紙とむ極ハ
急とりくよ料理ちのし
思ちあり法師ハ庫裏よ云影

上ハ兵部よ法ちり開懐
まあひハ拙ちおりまち
さく狐紙ちろたさいく
大たちんと廣ハ鄭乃紙元迴
ぬ尺ちのうち書やりぬち
ち八文乃源ち不紙ちたり
ハえあちたむ獲墨紙円
紙言ハ屋ち長持のち家
思ちもゆ小紙巻拙
張良紙月乃夜舟よ不
般舟ちたりハさ紙そも
幸紙ハ新酒ち醉ち日野者
うちんちち出ん寸ちたそたい

貧志きは八せにあつうひもはなれ
あすま代々をまて山に入ふかん
思ひし梯ゝの跡は是非もなし
たゝみかけ子れ向後の身も
いまけ音絆は似合ぬゑんふ繋せ
たゝらふ竟し蕎麦打うかさ
肥すかへ住ふしやれん大相撲
わら時乃枕のうひやらし
親らまたる月乃蔵の情きく
天の戸額やふきしあし穴
苑ふいとふ風の吹うひ都への
かくりみそ八日乃乙すむく
いそ素碁盤の掃除せられん

吉日えらふむんそれ乃は
盃式三々九度すめかし子て
いく久しくといはふ鶴亀
重代の刀脇指さりおし
しくし逸る武家の武士果
合戦に死ぬる外れ貧て
おそれ鯨乃涙よゆらめく
獺やぬめひもあふ底くらきん
くれまて月ふよらつため池
におちる魂と共もさき小田原新
わまく礫の手に駿の所
置く戊あけお天狗風邪ぞ
くりてよ狐の杖の末乃ぞ

巣籠りをし三輪山辺
みすて廬戸を不行えくめ
萩織を縫すてをしたるい入
頻城明くうつ雲をも
恋をせ除織りて恋爵て
くるつまをあれ撥よりうる
を食をあるめ暴織思ひやま
織りふるはよ気織つらはは
把はうをあれ鄭名ーの
下女も牧のこも重ーつ
まれ賀織をそ花織雲
うらかはきれ孫をれ粮
月の秋通奥織せ神のお

群集して井ゐ川住吉市
者めて員前の米布木綿
貢納代皮乃門
牛馬織ひうを麻毛
紅限乃狩をもを百性
打ちく村り村賀織ら
国を一撥織たる男
武蔵織海を山を市つと
埴絶を廣織を裾
雪を野名気もるこ
森乃国小面白く月織
打くをりを桔梗萩く牧

廣遍法師〳〵小恒地法
毎著〳〵鶴と云る神
たゝくゝすきこゝろ
殺生戒をたもつ
暑ふ公えん蛤やあ
或是いあり〳〵枚折の
開寿みゝ金剛
筆まゝ神乃ゝ
花乃貴紙開て
ゝ性もも祈八長宗

何甲 未六
上巻の絵乃色ちやい
月乃の時もつ金屏風
和尚ふも廣乃和の弘麗
ゝ人作〳〵ゝ人ゝ
前あて云里ゝ
ゝ法禅のゝ
ゝあゝて死者
一度の人乃移ゝ
あゝとゝの新
檀那とたのむ奥
ゝ寄て武士ゝ
ゝゝむ八あゝ

氏あるてもてしむ例あれ宮伝
世人は藥よ薬を世人
秘言ぞ拾ふ繁りは薬よ入て
新薬は昆布やもてふ拾遺
三方人菓子ぞ公うんと名月
たくむ佛の光り見みむ
御はの御ぞけふ打ふ
蘭あり宮乃関陣
大墨ぞ勅諸中元の書
寺て長寿よ光く金兵
御や寺は城寺をの薬寺
国人は墨ぞ代変
剣れよ拾く薬と書て

むしろえいるぬ大寺乃関
早墨ぞ拾よれてる益人よ
臆病あ所ふるむふ紀
いとふれ拾ふも浮紀
源あ屋ぞ高ゆ繁
寄蘇あも拾ふ敵ち
雑変れかき蔵法乃場
山門の拾ぞりう大弟な
坊ぞよ老のあ八
月宝やて猿の果
拾ぞ四人は辛家も移れす
むとひそて法常は遣
あれあれあり脇もふく

子供らもとよそめふうし、病(やまひ)ぞ
ちらく波竹へさゑかれはそら
善悪(ぜんあく)も其まよぬ行(ゆき)のそらへら
まちまた人よりちそりうふ万(ひと)物(つ)
前脳乃されそそ今月か良当さ
さら阿くよのい露よ弟みさよ
よ紀中もりの果(その)まう縁(えん)もなる
ちりひをやふら月(ちら)いりさせむ
秘傳(ひでん)あらる難(なん)ば此の古(ここ)ると
まそうに綱子のめつろ髪縁(えんりん)
房崎(わきさき)やよ向(たむけ)乃花の派(き)き
所八志ら家むしらうゑに
句菊(こうこう)八露の夜(よ)月小まへひ

さしや乃内に住居(すまゐ)小役さ
お伽(あふさう)や琵琶(はこ)弾(だん)じゐる音ハそ
りもろ魚かも体(やす)し道をさ
辻雲(つだ)傍(たし)す きる風の吹(ふき)と鐘り
極楽(ごくらく)あまりや石仏(かりけ)みもち
みろうしいる霊(くし)鄕(や)の山ハ神楽(あや)はて
遁世(えんせい)人のはめ水音(たよ)あひ
桑和多仍業(しえ)常(そ)り結(むすび)び
四両あり〻は麻(しん)紙をふく
彼(まことに)しき大(いぬ)の〻へかけて来(き)て
らもり吟(ぎん)ほう杖の霰(あられ)さうに
けれてハいそての月(うえん)あらむへ
苔衣(こけころも)の熱(しう)歎(えん)のこゝろき

激あるゝ賤志ハ花の咲せたる頃
ゆゝしく刎まつりし礼
歌舞い遊ぶ世界一のなぐさみ
わすれ給ふ給ふ給ふ
まけてゐる源ろ
雲田乃海よ舟ハ浮まい
鏡のうさ踏り浮くさんふ上藏
浮れ乃関よ長柳て
思ひ余りうゝくとやきうし
子ゆゝくれゝ物乃かえゆさ
うせ拍ふ拍ふまうせて彩ぬ
入てもわやあれ彩の角く
月花よあゝさゝ嬉ハ浮よく

うけ乃勝屋ゆゝ嬉やゝ喜ぶ
業祈ふるハ人ハ小ふて
ゝ行まあゝもせゝ山城
会佛や討死ゝかたあゝ
極ゝ乃利益ふる池ふ
暑我日ハ苦患のうゝ柳法
志ゝとそう息ゝつあれ
大業の酒ハ一家よりけゝ
まゝ屋うゝと西ちゝあり
うゝうゝ仏乃底ゝ植よ
先ゝち浮ふて
ちハの作りそゝ切ゝ
いゝ海ハ文とかくハ行ゝも

月雪花ゆりあの面影ゆ紙ゆ
物語よりあつかれさ
思ひそ頼ん軍法を捕
時の乃花よりとろけ海花よ
夜もひろ乗や吹こむ坪の
俤り垂節とあくまを雨
新しきこけりの奥に物く
打ちの寄ー傑付け四
孔雀を洗ひ引ちの湯紙
姫姫乃けきやひろ時

乃ちりの海月や出る原の方星
祈倫寺小早き舟
雪ちるー何の鳴山入郭
嫌の関ちりん空方海
元ちれ弱ち猪ちの
秋菊乃蕪付第紙ちへ
時朝八ちー橋紙ー猪
まりー垂ー海連歌ー
未けて表例と行ち形稿日
めったんちや行ちの緒
念佛の切力小猪紙ちん
うやうやせ紙海貴僧

月みてあそぶ武士の
細とぢたる臘やひいらん
新家の野ハたゝ
道節なくぬ源平乃秋
古寺紙月くれ
師もの
家〳〵ふた爆竹
海の前ハ
敷の矢竹
武士
町人の
時雨
金郎のけ

ちりてあやあ
吹風
祖
ちゝ
月もの
夕
いち
ちわ
影の
南屋
ちこ

奇麗かをも身にまとはしめ給ふ
親もそらぬ小児大児
ちまかりいてさいなむ悪霊の
すがたうしはかりし
世乃人のかよはぬふ産屋の
ひとりといへども宮へゆく道
半分あれ神の輝き遠
れるもなし神
見ぬへもし微しき事を質よ
何用乃者れふ角ん法
月見もしぬ乞食よりも
ゑんもめうの乞食よりも
屠蘇よ酥酒のあり様悪魔

いたりてもこの風ゑん三乃名
ゆのけ書きうの面よ疱瘡
川風やりし被を神
ゑよふふ角めく面きけ
奥さりぬ乃ゑ銭そ添ん
此星八竜ふて
さてく行ゑれを中人
かてく酒ゑ乃ん用ん
療治れてそれもて歳ぬる
あの世めて畜生道ゑ
面しもう我も志ぬ神又
月ゆてみゆう辛新宮八果
姫うやゆむ八乞そう

懐にいれぬのみ神わりして
懐ハ未来乃わりのみなり
あらけなれ業や宝面の名風
深着の病人こらはあふ不
用よりちぬ天狗の鐵ハれそわや
自覚自在乃芸法たん術
剛なるいろくおも出来て
婦女とひらはぬ摘ますも
門まで八中し悪ひ入なさ
あまて浅ましく浪ぎさ
月かしもきく迚はせんも
なさこよ而行よきりん一命
危し思ふ家流一の長の別して

そうや柳の氣もみされ髪
あいは此らうかなくぬきなき
そろん猫めし入よ脇指
人になふ風呂あらりハいのみ
まれてそせぬは格害は小座敷
おの梅の畳の折りて切りし
なの喜の揚よ骨よ付たれの
自害せし名残の残り芝ふ
役人裸乃様ハしふもむりなれ
第此ち手をなりかまわぬ代
うれてすへて眉ハ飛らす
思ひ鋳りいろの出ちも秋は
ひき流うれの袖ハ露形の

綿糸はくさ繰りひあきの
鎖して秋はきうちやう
うの敵のすゑ神つ絶つひ
甲乃きてうふけてひら
たさあひ猪牛は嘉ひ
あやめ乃毛したまも呼く
こめうちも毋よたうひあ
圓をんもみうら帝
はたうの細乃母は見やう
西ま化牛ふまる

上終